

書 評

久場嬉子編 『経済学とジェンダー』

--- T君への手紙 ---

Yoshiko KUBA ed., *Economics and Gender*

篠原三郎*

Saburo SHINOHARA

Abstract

Sexism is deep-rooted in the world. But feminism has had a great impact not only on the world but also on social sciences. This book *Economics and Gender* persuasively discusses why economics has taken the factor of gender into consideration and how feminist economics is constructed and in progress.

—

T君、しばらく、お元気ですか。

きょうは、昨年来読みたいと願いながら、部分的にしか目を通していなかった久場嬉子編『経済学とジェンダー』（明石書店、2002年）を、今年になってようやく全ページ、一気に読みえたので、関心は大いにあるものの、この方面に詳しくないぼく、きみの意見をききたく本書の紹介かたがた一筆とっているところです。

以前、しょっちゅう、社会学者のきみに問い詰められたように、経済学や経営学、社会科学の他の領域での反応と比べて、いまだにそうですが、ジェンダー問題への取り組み、なぜか、遅れています。学会や研究会にいつ出席しても、圧倒的に男性が多いというのも一因なのでしょう。いずれにしろ、歴史の動きに対する人間的にというか、社会的にというか、感度が鈍いとしか、目下のところいいようがありません。しかし、T君、いまだマイノリティにあるとはいえ、取り

* Former Professor, Nihon Fukushi University

組む研究者も着実に増えてきていることも事実です。

こういう現状を編者の久場氏は、「はしがき」でつぎのようにも述べています。

「主流派経済学は、極めてテクニカルな手法に偏り、経済学の枠だけにおさまって、政治や思想との結びつきを「規範的」として軽視してきた。一方、非主流派経済学、例えばマルクス経済学においても、ジェンダー視点から行う経済学の基礎概念や枠組みの見直しは、70年代以降今日に至るまで、基本的に一部の経済学者によって進められてきたのみである」としながら、「しかし、ここ10年余りの間に、経済学をめぐる状況は着実に変化しはじめてきた」と書いています。

長くはなりますが、その背景を語る久場氏の説明をききましょう。こう述べています。

「一つは、世紀の交代とともに踵を接して生じている経済社会の激動により、経済学の学問的有効性が厳しく問われるようになり、そのなかで、経済学の研究方向について一種の方向転換が指向されるようになったことであり、二つは、なによりも、経済学本来の課題についての問い返しが生まれてきたことである。90年代に入ってから顕著な展開をみせているフェミニスト経済学の登場は、このような動きと深く関わり合っている」。

T君、ここでいわれていること、経済学にかぎらず、すべての学問にもいえることですね。元気がでできます。

ところで、久場編のこの著者、これは第一巻なのですが、これを含んだ叢書、竹中恵美子・久場嬉子 監修『現代の経済・社会とジェンダー』全5巻が刊行されるようになったことも、経済学をめぐる状況の変化の一つの表れだし、また、大きな成果とも思えるのです。早速、簡単な紹介とぼくの感想をつづっておきます。

二

T君

本書全体が二部に分かれ、それぞれ五章、四章の九章からなり、9名の執筆者によってかかれています。以下のような目次になっています。

監修者のことば

はしがき

第 部 ジェンダーと「経済学批判」

第1章 ジェンダーと「経済学批判」

—— フェミニスト経済学の展開と革新 ——

第2章 女性労働差別問題とマルクス派社会経済学の再構築

第3章 合理的経済「男」を超えて

—— フェミニスト経済学とアマルティア・セン ——

第4章 労働市場の分断と女性労働

—— 二重労働市場論・SSAアプローチ・レギュレーション理論を中心にして ——

第5章 家事労働論の現段階

—— 日本における争点とその特質 ——

第 部 生産・社会的再生産・ジェンダー

第6章 人口問題と女性労働

—— 人間の再生産とジェンダーに関する一考察 ——

第7章 「女性労働政策」の効果はどのように変わったか

—— 夫婦単位から個人単位へ ——

第8章 女性労働の国際比較

—— 日本とオランダのパートタイム就労と雇用・社会保障 ——

第9章 フォーディズム・ポストフォーディズム・女性労働

—— 社会的レギュレーションの視点から ——

索引

T君

この目次を目にするだけで、本書がなにを課題としているのか、見えてくるでしょうが、編者の説明を読んでみます。勉強になります。

「本書は、70年代以降のフェミニズム労働論の課題を継承しつつ、経済学のなかにジェンダーの問題を位置づけようとする新しい動きを検証し、その意義を明らかにしようというものである。そして、本書の最も大きな特徴は、従来経済学がその領域から外してきた家族や世帯を、それ自体物質的基盤の一部としてとらえ、かつその内部の再生産労働（とくにケア）に新しく光をあて、生産領域と再生産領域という二つの異なった領域を統合（接合）して把握しようとするにある。言い換えれば、本書は、市場関係のもとでの財（商品）の生産を扱う経済学のなかに、再生産（ケア）を位置づける方法論を模索し、経済学の対象として、市場経済領域のみならず、国家（政府）はもとより家族や世帯という非市場経済や関係をも取り込もうとする試みとなっている」。

この編者の「試み」、T君、読了すれば、きっと実感できるでしょうが、成功したと思っています。なにしろ、執筆者が実力者ぞろいですね。率直に言って、どのようにして、これだけの執筆者を揃えられたのか、編者におききしたいほどです。

さて、そのうえで本書の中味に入っていきますが、T君、第I部では、「ジェンダー視点から経済学の再検討を試みている、理論的かつ学說的諸研究を扱い」、第II部では、「ジェンダーと人間の再生産に深く関わる現代の経済および労働問題に焦点」が当てられることになっています。

目次をみたときにも思われたように、こんなに多方面から「経済学とジェンダー」問題を取り上げている著書、編者も自負されているように、他にはないのではないのでしょうか。一冊の本でこれだけ、いろいろ勉強でき、啓発させていただくなんて、読了後の第一印象、率直に言って、

得をしてしまったという気持ちになりました。

とりわけ第 部では、ぼく自身このところ専業主夫をつづけていることもあってか、男性であるべくにさえ、なるほど、なるほどと実感できる叙述に出会うこと、しばしばでした。たとえば、第 6 章で指摘されているように、「具体的な、より根本的な問題の所在は、つまるところ再生産労働、あるいは再生産に関わる負担にあるといえよう。市場経済における再生産労働を、社会のあらゆる構成員がいかにも公平に、ジェンダー・フリーに負担するかが、政策上、最重要課題とされるべきである」とされながらも、日本の現状は、第 7 章で詳細に語られているように、また、第 8 章でもオランダとの比較でいねいに展開されているように、「社会制度の改革や性別役割分担の社会的規範を崩す政策といった再生産側の整備の整わないままの状態」であり、「パートタイム労働者の増加は労働環境と条件の劣悪な女性労働者を増加させるだけである」現実、なにが「男女共同参画社会」なんだと、日本政府のタテマエにも腹立たしくなってきました。

T 君、こんな困った日本に生きているのがわれわれの現状なんですね。

このオランダと日本の格差の社会的なあり方に思いをはせているとき、例のハワード・ジン氏の『ソーホーのマルクス——マルクスの現代アメリカ批評——』（こぶし書房、2002 年）の翻訳者として知られている竹内真澄氏の論文「デンマーク福祉国家と SF (1), (2)」（『桃山学院大学社会学論集』、第 36 巻第 1 号、第 2 号）が目につかなくてなりません。本書と同様、きみにも読んでもらいたい作品です。

ともあれ、T 君、こういう第 部で解明されていく女性労働のきびしい現状認識をふまえ、提起されてくる課題解決に結びつくべくアクティブに取り組んでいこうとされる研究姿勢ゆえにか、第 I 部での「フェミニスト経済学」者たちによる「理論と学説研究」もきわめて意欲的です。「フェミニスト経済学」なるものを組織的に勉強したことの無いぼくのようなものには、第 1 章なんかは、学説の大きな流れを現実生活に引きつけて理解していくのに大いに役立ちました。

「主流の経済学」として流通している新古典派経済学のジェンダー理解、その学説の限界、また、これまでの経済学が「ブラックボックス」化してきた「非市場領域である家族や世帯内の行動や動機、さらにそれらの組織や関係を、経済全体の生産プロセスと統合して把握」し、「経済的行動主体」をケアレスな賃労働者モデルではない、「社会的な存在として、つまり経済主体の行動を優れて社会的に構成」しているものとして経済学に位置づけ、展開しようとしているノーベル経済学賞の受賞者の A・セン氏の考え方、さらには「ジェンダー平等の経済社会構想へ向けて」の G・E・Anderson 氏などのフェミニスト経済学による理論的展開がわかりやすく語られて、いい勉強となりました。

こうやって第 1 章を読み終えたとき、そうであれば、つづけて、マルクス経済学者の世界では、ジェンダー問題、どのように受けてとめているのか、筆者の所説をききたくなっていたのですが、それは、別の執筆者による第 2 章で、「マルクス派社会経済学の再構築」という課題意識にたつて、改めて展開されるようになっていました。

ついでにいえば、T 君、第 1 章でのテーマをより深く理解していくためには第 5 章が参考にな

ります。そこでは、第1章での問題関心と重なっていくように、日本の研究者のあいだでの論争が要領よく紹介されています。さすが、この問題のベテラン研究者です。アンペイド・ワーク論に注目される筆者らの姿勢とその意味も理解できました。その意味でも第1章のあとに第5章をつづけて読むのもいいですね。

また第1章で取り上げられていたA・セン氏の主張をめぐっては、あらために、第3章で詳しく紹介されています。先述したような、主流派経済学の「ケアレスな成人男性」を内容とする「合理的経済人」モデルがフェミニズムの視点からきびしく、徹底的とっていいほど批判されています。

T君

少々回り道してしまいましたが、話が第2章に戻ります。

ここでは、フェミニズム運動のインパクトを受け、マルクス経済学者たちはいかにそれに対応し、あらたなる展開をこころみようとしていたかが、理論的明快さで整理され紹介されていますが、最後に、ぼくも知っている森田成也氏、玉野井芳郎氏、ヒメルワイト氏らの研究方法に関心の焦点を向けていこうとされているあたり、他の執筆者のスタンスとは違った筆者のユニークな雰囲気を感じられました。

マルクス経済学の根幹にもかかわる価値・生産価格論を再検討されながら、「資本主義の内的論理ないし資本制経済システムの原理的認識自体」に光をあて、そのあり方をストレートに問い直しつつ、「市場経済システムと不等価交換の常態性」というテーマを提示され、その視点から女性労働差別問題の理論的意味を明らかにしようとしています。「転化問題論争」の勉強にもなります。その具体的展開については、ぜひ、第2章をみてください。

そのうえで、T君、一つ思うことがあるのですが、市場経済システムの不等価交換といった問題を、筆者のように「転化問題」をわざわざ持ち出さなくとも、「体制を超えた経済原則的世界」なるものが、資本制経済システムでは価値法則を基底においてしか成立しえないところに、差別問題を引き起こすそもそもの真因があるのではないかと、ぼくには思えるのですが、いかがでしょうか。A・セン氏にしても、また、その他のフェミニスト経済学者が理論的に問うていることも、又、その解決の方途を現実にも追求しようとするとき、最終的にそこで打ち当たっていくものは、価値法則なのではないでしょうか。商品交換が、そもそもそれらの商品をつくるのにかかる抽象的人間労働の量を基準にしておこなわれなければならないこと自体が問題なのではないでしょうか。20エレのリンネルと一着の上衣の交換、商品交換者同士からみれば平等かもしれないが、使用価値の立場からみれば、そして、かれらに言葉があれば、不等価交換であり、差別であると異議を申し立てるかもしれません。幸い、男と女は言葉をもった人間です。人間は性差別に対して、他の社会的諸差別に対するのと同じように、いつまでも黙ってはいません。労働は人間の諸活動の一つのあり方なのではないでしょうか。ペイド・ワークはもちろん、アンペイド・ワークもあり、その他にも、無数の活動のあり方がありうるはずです。それらの諸活動のあり方を考慮した基準もあっていいのではないのでしょうか。この問題をめぐっては、以前、きみに送った拙稿

「市場経済の二面性——平等と差別——」（『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』，第108号）をあわせ、きみの意見がうかがえれば幸いです。

さて、第4章、ここは第9章もそうでしたが、ぼくの知らぬことばかり、教室に出席し、優れた先生方の明快な講義をきくようで、ただただ教えられるばかりでした。

女性労働差別問題に立ち向う「二重労働市場論」，「SSA アプローチ」，「レギュレーション理論」などの所説が検討されつつ、それぞれの限界、課題が提示され、すっかり、いい勉強をしました。とくに、レギュレーション理論をめくっては多くのことを知ったような思いであります。最終章に第9章が置かれてありましたが、第I部の第4章のあとにあってもよいように感じました。

三

T君

本書の荒っぽい紹介かたがた、その都度感じた感想と印象を述べてきたのですが、最後に一言。

フェミニスト経済学はフェミニズムの運動からインパクトを受け、影響されつつ展開してきたように、ほとんどの執筆者が理解され、それぞれの論もフェミニズムに引きつけ展開されていたように思えたのですが、また、たしかにその通りに受けとめてはいますが、そもそものフェミニズム、思想としては、ずいぶん古くからあったのではないかと考えているのですが、この思想と運動がなぜ、こんにち大きな運動として歴史的に登場してくるようになってきたのか、資本主義経済の運動と構造の歴史的な変化との関連で解明していくべき課題もあったのではないか、その辺りの論及もあって欲しく思えてなりませんでした。フェミニスト経済学の構築、また、その将来展望にとっても理論的に大切なことと考えるものですから。しかし、もしかすると、この疑問、T君、本書のぼくらの理解の不十分さに起因しているのかもしれない。

T君

ともあれ、きみの意見を待っています。と同時に、足立真理子氏の言葉（上野千鶴子編著『ラディカルに語れば……』，平凡社，2001年）を少々勝手に利用して言わせてもらえば、経済学を「嫌い」，「嫌」で、（ぼく自身は学問上のテリトリー意識なんてないんですが）すべて、社会的に説明しなくては気のすまない連中の多いきみの職場の人たちにも、できれば本書を読んでもらい、読後感をききたく思っています。

ジェンダーにさらに不幸を刻み込む戦つづけば和むときなき

(2003年4月1日，記)